清流

題字：芳野充

令和5年11月30日
第83号

発行所　加来不動産㈱
発行者　加来　寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

時間を大事につかう

わたしの父親は、わたしが高校三年生のときに脳梗塞にかかり、半年ほど入院したあと、亡くなりました。当時のわたしは、肉親がこんなにもはやくこの世からいなくなるという現実に気持ちがついてこず、一時は「夢ではないだろうか」との感覚が色濃くのこっていたことを、今でも覚えています。

気づけば長男が高校二年生になり、来年には三年生です。もしかすると、わたしも来年この世をさる可能性もあるな、と考えたときには「伝えることはキチンと伝えたい」「物事を先のばしにせず、いまできることはいましよう」などという考えが頭をよぎりましたが、気づけば心のどこかで「そんなことはないだろう」という思いに流されていました。

ところが十一月十四日の夕方、保育園のころからの幼なじみのお母さんから突然携帯に電話がかかり、「息子が急逝した」とのこと。頭が一瞬にして真っ白になりました。動揺しながらも理由をたずねると、職場で急にたおれて救急車で運ばれたが、大動脈りゅう破裂でとつぜんだった、と。

次の日の通夜に参列するため、予定を急きょキャンセルしました。葬儀場に足を運ぶと、笑顔の幼なじみが遺影に収まっている空間を目にした瞬間、心臓がにぎりつぶされるように苦しくつらくなり、「明日は当たり前にやってくる」と心のどこかで思っていたことが急にこわくなりました。「いま。わたしがこの世からいなくなるとしたら、後悔しかない」そう感じるわたしがいました。

笑顔の幼なじみをじっと見つめながら考えました。忙しい、天気が悪い、思い通りに人が動いてくれない、誰もほめてくれない、となげいているうちにも時間は過ぎ、命が縮んでいっている。もし、一年後あるいは半年後に、「あなたは死にますよ」、と言われてもいまと何も変わらないだろうか、と考えると、もっと時間を、命を大事につかわないと後悔する。「いま、ここ」に注力しないと「生きたい」と思ったに違いない幼なじみに申し訳がない、と感じました。

「忙しいのになぜわたしがこんなことをしなければいけないのだ」を、「頼まれごとは試されごと」と気持ちを切り替えて取り組む。「天気が悪い」を、「この天気で助かる人もいるし、一日だって同じ日はない」とその天気を味わう。「思い通りに人が動いてくれない」を、「自分を磨き感化できる人を目指そう、人が動きたくなるわくわくする仕組みをつくろう」と自己研鑽と創意工夫に注力する。「誰もほめてくれない」を、「神さまか仏さまがきっとみていてくれる」と心おだやかに過ごす。いまある命に感謝し、そして時間を大事につかい、後悔のない生き方を目指します。

加来　寛